

車 軸 の 雨

六十四転大劫

大千世界には十億の世界があつて、その総べての世界には太陽や月があり、須弥山 (Sumeru) があるらしく、長阿含經にも

千世界中有千日月、千須弥山王 (Sumeru parvata rāja) (大 1-1146)。

また大劫 (Mahā-kalpa)^(註1) は我世界の興亡の輪廻周期であるが、総べての世界、A世界にもB世界にも位相の違いはあつても、この大劫は存在するのである。この大劫は次の四期に分けられる。

I 壞劫 Samvarta-kalpa.

II 空劫 Samvarta-Sthāyi-kalpa.

III 成劫 Vivarta-kalpa.

IV 住劫 Vivarta-Sthāyi-kalpa.

壞劫は世界の崩壊期で、崩壊の究極は零（Śūnyā 空）である。空劫は崩壊の究極の持続であり、成劫は零から出発して世界を創造する時期である。そして充分に創成された世界を持続するのが住劫であり、この充分な世界も壞劫に入ると崩壊する。この繰り返しが、我世界興亡の輪廻であり、大千世界の一つ一つの輪廻でもある。阿毘達磨大毘婆沙論に。

仏告苾芻我眼清淨過於人眼、見東方等無數世界、或有正壞、或壞已空、或有正成、或成已住。〔27-692c〕

とある。

この劫は時間の單位で、大劫、中劫、小劫が立てられる。この關係は次の如くである。

$$1 \text{ 大劫} = 80 \text{ 中劫}$$

$$1 \text{ 中劫} = 20 \text{ 小劫}$$

だから一大劫は1600小劫であり、壞劫、空劫、成劫、住劫は各々二十中劫、四百小劫である。よく「無数百千歳」と表現される劫の概念を実感するための喩話に盤石劫 (Parvatōpama-kalpa)、芥子劫 (Sarsapōpama-kalpa) がある。

『阿含經』に、

譬如鉄城方一由旬 (Yojana)、高下亦爾、滿中芥子 (白芥子)。有人百年取一芥子、盡其芥子、劫猶不竟。〔因2-242b〕

如大石山不斷不壞、方一由旬、若有士夫、以迦尸 (Kāśī、現在のBenares) 劫貝 (Karpāsa) 百年一枌枌之不已、石山遂劫猶不竟。〔因2-242c〕

大智度論にも

四千里石山有長壽人、百歲過持細軟衣一來枌枌、令是大石山盡、劫故未盡。

四千里大城、滿中芥子、不概令平、有長壽人、

百歳過一來取一芥子去、芥子盡、劫故不盡。(大)
25-100c]

また同じ大智度論に

有方百由旬城溢滿芥子、有長寿人過百歳持一芥子去。芥子都盡劫猶不漸。

又如方百由旬石、有人百歳持迦尸輕軟疊衣一來取之石盡劫猶不漸。(大) 25-339b]

阿毘達磨大毘婆沙論にも

今爲汝說、如近城邑有金段石山、縱有高量各踰繕那(Yojana)、迦尸細緯百年一取。(大) 27-700b]

縦横高之が各々 / Yojana (大智度論では 100 Yojana、或は / Yojana = 40 華里としての 4000 華里) の城壁内に白芥子(カラシ)の種子を一杯に満し、不老不死の仙人が居て、百年毎に芥子を一粒づつ取りをって行き、中の芥子が無くなつて了う年数、つまり芥子の総数に百年を掛けた年

数、これが芥子劫であるが、この芥子劫の長さよりも、小劫の方がもっと長いと言う。

また縦横高さが各々1 Yojana (大智度論では100 Yojana = 4000 華里) の大石山が在って、不老不死の仙人が裾長い Benares 産の輕軟毼衣 (Kāsika Sūkṣma vastra) を着て、百年に一度、大石山上を歩き廻る。非常に軟い布とは言え大石は磨滅してゆく。全く磨滅し尽す年数が盤石劫であるが、小劫の方がもっと長いと言う。

この劫貝、輕軟毼衣、細縷、細軟衣などは皆な綿布らしい。劫貝は古貝、吉貝とも見え、梵語の Karpāsa、巴利語の Kappāsa、馬來語の Karpas などの綿である。大般涅槃經第二十に

覺身細軟猶如繒綿劫貝娑花。

とある。繒綿は眞綿だろうが、劫貝娑花は一切經音義 [(大) 54-476a] に依ると

花同柳絮、可以爲綿、詢問梵僧白疊是也。

同じ音義〔大〕54-33/c〕にも白疊とは、

西国草色也、其草花絮堪以爲布。

である。大般涅槃經の「身に細軟を覺ゆ」は少しもザラザラしないSoftの感触を言うので、細軟衣も上質の綿紗であろうか。

仏典の筆法を以てする無数北京歳も生き続ける剛体的人間である仙人が居て、絶対に風化しない剛体的な大石山も磨滅はするらしいが、この磐石劫を算出する事は難かしい。しかし腐敗も発芽もない剛体的な芥子一粒の体積を半粒立方程とすれば、一由旬立方内の芥子の総数は計算出来なくはなく、竜樹菩薩さんが寸法を百倍にした心持ちも分るなくはない。しかし、計算してみたところで、何んの面白味もない。小劫の年数は無数北京歳でよいではないか。

因みに、この芥子劫と同じ手法が、長阿含經〔 $\textcircled{\text{大}}1-125_c$ 〕、大樓炭經〔 $\textcircled{\text{大}}1-286_c$ 〕、起世經〔 $\textcircled{\text{大}}1-329_a$ 〕、起世因本經〔 $\textcircled{\text{大}}1-384_b$ 〕及び *Sutta-nipata* の *kokālika* (倶迦利。舍利弗と目連を中傷し妄語の罪を犯す) の章などにみえる。

長阿含經によれば十地獄の中で最も寿命の短いとされる厚雲地獄のそれが如何に長い歲月であるかを実感させる次文がある。

仏告比丘、喻如有篇受六十四斛滿中胡麻、有人百歲持一麻去如是至盡、厚雲地獄受罪未竟。

つまり、六十四石入りの篇(竹囲ひの穀倉)に胡麻を一杯入れ、百年毎に胡麻一粒づつを取り去ってゆき、胡麻が完全に無くなってう年数よりも、厚雲地獄の寿命の方が、もっと長い。

そして次の如く中劫と関係づけられる。

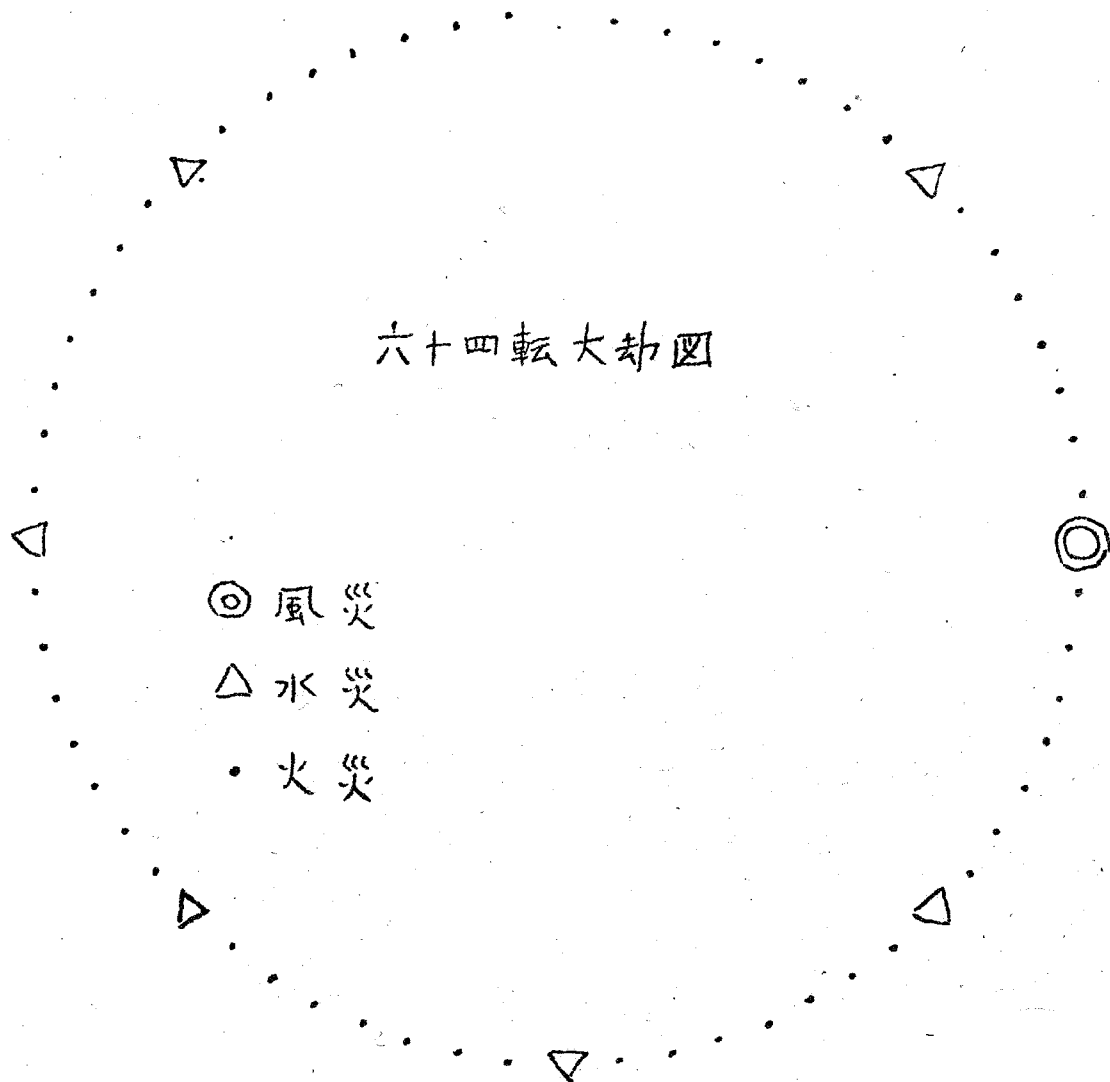
厚雲 $\times 20 =$ 無雲, 無雲 $\times 20 =$ 呵呵

呵呵 $\times 20 =$ 奈何 , 奈何 $\times 20 =$ 羊鳴
羊鳴 $\times 20 =$ 須乾提, 須乾提 $\times 20 =$ 優鉢羅
優鉢羅 $\times 20 =$ 拘物頭, 拘物頭 $\times 20 =$ 分陀利
分陀利 $\times 20 =$ 鉢頭摩, 鉢頭摩 $\times 20 =$ 中劫
〔中劫 $\times 20 =$ 大劫〕

これは一番短い厚雲地獄の寿命の二十倍が無雲地獄の寿命であり、十地獄の寿命を次々に二十倍して行くと、鉢頭摩地獄の寿命の二十倍は中劫の年数に当ると云う。最後の〔中劫 $\times 20 =$ 大劫〕は他の經文にはない。勿論、中劫 $\times 20 =$ 壞劫 = 空劫 = 成劫 = 住劫のはずである。

それはそれとして、壞劫には三つの型、火災型、水災型、風災型の三様があり、それ等を含む大劫を火災型大劫、水災型大劫、風災型大劫とするとそれをより大きい周期の中に組込んだのが六十四轉大劫である。

六十四轉大劫圖



それは風災の大劫に始まり、「火災の大劫が七回
 續き、次に水災の大劫一回という組合せ」が八回
 繰返されて、最初の風災の大劫に帰える大周期で

ある。〔六十四轉大劫図〕

この円周を 64 等分する方法は $\frac{1}{2}$ の繰返す事によつて達しられる。 $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{8}$, $\frac{1}{16}$, $\frac{1}{32}$, $\frac{1}{64}$ の如くである。この 64 等分はまた周易の六十四卦でもある。

壊劫(水災)の車軸の雨

壊劫に於ける三災の様子をみるに、火災の場合には七つもの太陽が並び現れて光音天以下の世界を焼き潰し、風災では猛風が荒れ狂い、恰も金剛力士が銅杵を以つて地をまわす暴れ廻つたように果実天以下の世界を粉々に打ち砕くとされる。それに対して水災では熱湯の車軸の雨が無数百千万年も降りつづき、次の如く大樓炭經では、それは沸灰(恐らく強アルカリ性の熱湯)の豪雨である。

久久大雲復起、上行至故第十五天上、其雲下大

沸灰雨其滯大如車軸、天雨沸灰、如是久久、數百
千萬歲、諸四天下、八万城諸大山及須弥山、從第
十五天(遍淨天)上、以下至四天下皆糜爛消滅盡
無餘。〔大〕1-304c〕

地獄の中に灰河と云うのがあり、この壞劫に於
ける水災の小型として注目される。阿毘達磨俱舍
衆論に

四、烈灰汁江(Kṣāra-nadi)園、江名韓多梨
尼(巴 Vetaraṇī, 梵 Vaitaraṇī、灰河と訳さ
れる。)遍滿極熱烈灰汁水、衆生若入其中、於兩
岸上有人捉劍槊叉等仗、遮斷不令得上、衆生在中
或踊向上或沈入下、或傍迴轉被蒸煮熟、譬如大鑊
滿其中水(この水は烈灰汁水だろう。阿毘達磨俱
舍論でのそれは盛灰汁である。〔大〕29-58c)下燃猛
火、於中有米豆麻麥等被蒸煮熟。〔大〕29-216a〕

この灰河に於ける衆生の命運状況に譬えられる

五穀を^ア灰汁^ク水で煮る料理法（灰羹）は当時の^{（国）}中^{（中）}でも一般的だつたと思われる。水経・章貢水注に

城中有井、其水色半清半黄、黄者如灰汁、取作飲粥、悉皆金色、而甚芬香。

——成劫の車軸の雨——

壊劫の三災によつて我が世界は最上天部の無色界四天などを残して崩壊し、変化のない長い長い時間だけの空劫の期間に入る。そして、やがて成劫が始まると、変化は復活し、二次に亘る豪雨によつて器世界（Bhājana-loka、環境）の再建が始まる。第一次は地の世界の再現であるが、それは三災によつて雨量を異にする。この雨量は由旬（40華里、我6-7里）の單位で測られるが、「無数百千由旬」と表現される程、膨大な雨量である。そして第二次は海洋、湖沼、河川を復活させる雨であ

る。長阿含經によつて三災別の第一次降雨の模様をみると、先づ火災の場合、

其後久久有大黒雲在虚空中、至光音天周遍雨滂如車輪、如是無數百千萬歳、雨其水漸長高無數百千由旬、乃至光音天。〔大〕1-138c〕

次に水災の場合は

其後久久有大黒雲、充滿虚空至遍淨天、周遍降雨滂如車輪、如是無數百千萬歳、其水漸長至遍淨天。〔大〕1-140b〕

ついで風災の場合は

其後久久有大黒雲、周遍虚空至果實天、而降大雨滂如車輪、霖雨無數百千萬歳、其水漸長至果實天。〔大〕1-141a〕

第二次降雨は各災共通で

其後久久有自然雲遍滿空中、周遍大雨滂如車輪、其水弥漫沒四天下与須弥山等、其後乱風吹地爲大

坑、澗水盡入中因此爲海、以是因緣有四大海水。〔

①1-139bc〕

第一次降雨の何れの場合にも最初に現れる大黒雲は水分を充分に含んだ雨雲である。長阿含經などには雲を色によって分類し、

仏告比丘、雲有四種、云何爲四、一者白色、二者黑色、三者赤色、四者紅色、其白色者地大偏多其黑色者水大偏、其赤色者火大偏多、其紅色者風大偏多。〔①1-136c, 348b, 403b〕

とあり、黒雲は水大の雲である。それに対して第二次降雨の場合は、怖らく四種の混合した比較的水大を含むことの少ない自然雲で、須弥山が没する程の雨量である。

第一次豪雨の降水量が光音天、遍淨天、或いは果實天のレベルに到すると、長阿含經では四風（住風、持風、不動、堅固）、起世經と起世因本經

では四種風輪、大樓炭經では風形が現れる。これは單なる吹く風ではなく、風大の塊で、それは降り剩った水分を取り込み、勢い余って降った雨量の一部をも吸収するのだらう。車軸の雨を降り止めさせ（雨断已後）、降水量をも少しく減らす（其後此水稍減、無數百千由旬）ことも理解出来るように思われる。

そして繼いで僧伽（僧竭、阿那毘羅 Anāvila）の猛風が吹き荒び全雨量を沫きと泡に化して大地に元素変換してらう。

それから、海洋を創る第二次降水があつて、ほゞ畚世界は出来上る。

—— 雨 滴 ——

先に掲げた長阿含經の「雨滴如車輪」はよく「雨滴如車軸」の伝誤ではないかと考えられたか、訂正して引用されることが實に多い。しかし、こ

れは伝誤ではないと考える。この長阿含經と車軸の比較的多い起世經、起世因本經の次と較べてみると、

注大洪雨、其滴甚麤、或如車軸、或復如杵。〔

① 1-355c〕

便降大雨、其滴麤大、或如車軸、或復杵。〔①

1-358a〕

注大洪雨、其雨沛麤猶如車軸、或有如杵。〔①
-410c〕

即降大雨、其雨沛麤、猶如車軸、或有如杵〔①
-413a〕

の如く、これらでは雨滴の形は車軸、或いは杵である。そして又、この兩經には雪山王 (Himavat-parvata-rājan) の中の阿耨達多池を初めとして外の有名な池の規模や植っている蓮華の様子が記載されている。一例を起世經の阿耨達多池の蓮華

に見ると、

復有諸華、優鉢羅 (Utpala 青蓮華) 華、鉢頭摩 (Padma 紅蓮華) 華、拘牟陀 (Kumuda 黃蓮華) 華、奔荼利迦 (Pundarika 白蓮華) 華、其華雜色青黃赤白、大如車輪、下有藕根、麤如車軸、汁白如乳、味甘如蜜。

以上の如く、蓮華を車輪に喩え、蓮根を車軸に喩えている。このことは外の起世經、起世因本經の諸池においても同様で次の如し。

(起世經)

阿耨達多池 (華大如車輪、藕根麤如車軸、(大) 1-312c)

曼陀吉尼池 (藕根大如車軸、(大) 1-313b)

阿耨達多池 (華大如車輪、藕大如車軸、(大) 1-314c)

難陀池 (團如車輪、藕根大如車軸、(大) 1-337a)

歡喜池 (皆如車輪、藕根大如車軸、(大) 1-342a)

[起世因本經]

烏禪那迦海（華如車輪、根如車軸、(大) 1-367c）

阿耨達池（華如車輪、藕根大如車軸、(大) 1-368a）

曼陀吉尼池（藕根大如車軸、(大) 1-368b）

阿耨達多池（華大如車輪、藕根大如車軸、(大) 1-369c）

難陀池（藕根生、大如車軸、(大) 1-392a）

那隣尼池（藕根、大如車軸、(大) 1-395b）

歡喜池（藕根、大如車軸、(大) 1-397a）

これに対して長阿含經と大樓炭經では

[長阿含經]

阿耨達池（華如車輪、根如車轂、(大) 1-116c）

麻陀延池（華如車輪、根如車轂、(大) 1-117b）

跋難陀池（根如車轂、(大) 1-129c）

那隣尼池（花根大如車轂、(大) 1-130b）

難陀池（根如車轂、(大) 1-131c）

〔大樓炭經〕

阿耨達水（大如車輪、莖大如車轂、**大** 1-278c）

摩那摩池（華大如車輪、莖如車轂、**大** 1-279b）

難陀浴池（華大如車輪、莖如車轂、**大** 1-295a）

以上の如く蓮華は車輪に、根は車轂（Nābhi. 車のスポクが集まり、車軸を中心の穴に貫く部分）であり、全体的に長阿含經には車軸の文字の使用はない。長阿含經に似た大樓炭經の場合の雨滴は

有大雲起於大雨、其滂大如車輪、**大** 1-303c

其雲上至阿迦尼吒天（Akanistha 色究竟天）放
雨大如車軸 **大** 1-304b

其雲下大沸灰雨、其滂大如車軸 **大** 1-304c

以上の如く、車輪、車軸と区々である。

漢訳仏典の旧新訳の境界は玄奘とされるが、この玄奘以後には「車軸」に定着しているようであるが、旧訳仏典では、それは区々である。長阿含

經の車輪、起世經の或如車軸、或復如杵は前記したが、陳の眞諦訳の立世阿毘曇論と阿毘達磨俱舍論には次がある。

己天降甘雨滍如樓大、漸細如輪乃至車軸(大)32-225b

諸雲聚集雨、雨滴如大柱、此水輪成(大)29-214aの如く区々である。

ここで仏典の火災劫の様子と印度教のVisnu-Purānaの第一次的消滅とは非常に似かよっている事を思い出す。同じ印度の思想であり、別に不思議はないのかも知れないが、定方最先生の「インド宇宙誌」の終末と世界消滅、特に第一の「形状的消滅」p.146-148を拜讀して興味をそゝられた。

仏典の火災劫と同じく七個の太陽が出来て、その猛火は三界を灰燼に歸し、その影響は不燃のTapo-lokaの二つ下層のMahar-loka迄に及ぶとされる。

そして Viṣṇu 神は巨大な雲の固まりを幾つも幾つ
も吐きだす。形は象、町、山、家、柱のようなも
のだった。これは前記仏典内の車輪、車軸、杵、
樓、大柱の巨大な雨滴を連想させる。それからこ
の Viṣṇu の雲が、あたりを一面に覆うと、雨が滝
のように降りだし、百年も続く（仏典の無数百千
万歳に較べると短かすぎる感じ、或は此年は俗年
ではないのかも知れない。）そして降水位が Svar-
loka 内の七聖仙（北斗七星）の位までに達すると
雨は止む。それから Viṣṇu 神の息が猛風となって
百年以上も吹きつづけ、雲を吹き散らす。そして
風を再吸収して、Viṣṇu 神は眠りにつく（空劫か）。

古印度は一寸した車社会だったように思はれる。
陸の隊商は「車五百輛」、海の貿易船には「商人
五百人」と言うのが、この種の物語の常套文句と
成っている。この種の荷車を Śakata と云う。ま

た叙事詩 Mahābhārata の中で、弓の名手 Arjuna を乗せて走り廻る猿印の白馬四頭立の戦車を始め、多くの戦士の間で勇壮な戦車のチャンバラが行はれた。また三角形をした閻浮提（印度）を「北広南陲、三辺量等、其相如車（阿毘達磨俱舍論（大）29-57c）と車に譬えられるが、起世経では其が「婆羅門車（大）1-311b）とみえる。婆羅門階級の人々がよく乗り廻していた車だろうか、この種の二輪車が Ratha である。

一般的に車で多かった故障は折軸であった。

車軸折不任重載（大般涅槃经（大）12-436c）

車軸折不任重載（ " " - 678b）

車軸断折（大乘修行菩薩行門諸经要集（大）17-941b）

軸折（有部毘奈耶（大）23-738b）

其車軸折（有部尼陀那目得迦（大）24-442a）

有一賈客車軸折（鼻奈耶（大）24-876c）

以上の中で面白いのは尼陀那目得迦の車軸天尊の話である。

その時、仏は室羅伐 (*Śrāvastī* 舍衛) 城の逝多林給孤獨園 (*Jetavana Anāthapiṇḍadāsyāma* 祇園精舍) に在られたが、その付近の出来事であろう。

六衆苾芻 (*Saḍvargiya-bhikkṣu*、反面教師として律部の經文の中で活躍する比丘崩れの非行六人と、名も知れない一車商が接近しようとしていた。商人は車軸が折れたので予備の新しい車軸 (別將餘軸替之とあるからスペアを持って旅するのだらう) に換えて、折軸は道に放棄し何處へか去って行った。後から通りかかった六人組は、この折軸を拾いあげ十字路の道畔に悪戯っぽく立て「車軸天尊」と名付け祭り上げ、何處ともなく去って行った。

ところが、それを祭りつづける長者が現れ、信心する者が段々に増え、立派な堂廟も出来、通過

する商人達は立派な供物を捧げ、殷賑を極める神祠となつていった。幾年か過ぎて、この六人組が再び廻り来て、彼等の目に映じたものは衣物劫貝毛などの夥しい供物だった。六人組は、創建は我等にありと、所有権を主張し、守廟^人などとの間に争が始まった。しかし結局は定石通りに仏の裁定で落ち着くのだが。

この車軸はAkṣa(握槊、悪叉などと音写される)であるが、このAkṣa はまた骰子でもある。と言っても念珠の玉程の雨滴では真面目くもない。この骰子は正六面体のサイコロではなく、周易の蓍竹と同じような算子であつて、セイタカミロバラン(学名 Terminalia Belerica)とか、ジュズボダイジュ(Elaeocarpus Ganitus)の果実の核を用いる。澤山な核をばらまき、この中から例えば片掌一杯とかを取り別け、その数を4で割、剰余を

求める。

剰余	名称	吉凶	剰余	名称	吉凶
0	Kṛta	大吉	2	Dvāpara	小凶
1	Tretā	小吉	3	Kali	大凶

とする。ところでインダス文明(3000-1500 B.C.)の出土とする骰子があるらしい。それは淡紅色の焼いた土製品で、大きさは1.2-1.5 cm位、そして昨今のサイコロとは違って、1の裏は2、3の裏は4の組合せであると言う。筆者は実物^{は勿論}写真さえ見た訳ではないが、インダス文明と其後の古代印度文化の間に何等かの繋がりがあるならば、金六卦ではなく、全四卦のはず。正六面体の骰子ではなく、正四面体か、右図のような立方体ではなかろうか。伝えられ



る寸法が1.2-1.5 cmで正立方体ではなく、「5の裏は6」の説明のないことも、このサイコロが四卦

の骰子のように思われる。

それから、車軸は、時には $\bar{I}\bar{s}\bar{a}-dh\bar{a}r\bar{a}$ を車軸滴と訳された事もあったらしい。 $\bar{I}\bar{s}\bar{a}$ は轅、車の舵棒であり、 $Dh\bar{a}r\bar{a}$ は雨滴らしい。

——住劫の車軸雨——

壞劫と成劫の時に、あれ程猛威を振った車軸の雨も、住劫に入ると全くダラシナイ。先ず十誦律の

譬如大海、閻浮提 (Jambudīpa) 界四大河流入、所謂恒 (Gangā) 河、夜摩那 (Yamunā) 河、波羅 (Sarabhu) 河、阿醯羅婆提 (Aciravatī)、摩駄 (Mahi) 河流入大海、有龍力出水及澍洪雨如車軸下、受如是水海不增不減、(大) 23-240a)

がある。ここでは四大河とするが、河名からすると五大河系名であり、四河にする爲に Aciravatī 河と Mahi 河を合せて一河とされている。また国訳大藏經では波羅を Barana と解されているが、Bara-

na 河は仏教史では有名かも知れないが、大河とするには相応しくない。それはさておき、竜神の力を以て車軸の大雨が降りつづいて四大河の流量が増えても大海の水位には何人の影響も及ぼさないと言うのである。

次に、根本説一切有部毘奈耶雜事の

於大獄上降注洪雨滍如車軸、獄中猛焰令空中雨
隨處銷亡 (大) 24-287a)

であるが、八大地獄の上には車軸の豪雨が降り注ぐとも、獄中の猛焰によって空中で蒸発消滅して
う。の意味であろう。

次に、華嚴經探玄記の

此珠力故、爲天雨滍如車軸能作蓋覆一由旬遮此
大雨不令下過此珠。(大) 35-257b)

この神珠寶の功力によって、仮りに滴が車軸のよ
うな猛雨が降るうとも、すぐに一由旬もの蓋を作

つて履い冠せ、猛雨を遮ぎって此珠の下には漏させない。の意であらう。

——日本の車軸の雨——

車軸の雨は日本で、より地方的に奇妙な展開のしかたをする。その最初は宇都保物語の俊蔭の巻の

くるまのわのごとなるあめふり

であらう。国文学者の中には、この車の輪が気になるらしく、車軸に換えたらしい。しかし、これは前記の長阿含經の車輪である。

平安時代も末になって、藤原頼長の台記の康治元年(1142)五月十二日の條の「如車軸」や宇治拾遺二・二の「しやぢくのごとくなる雨ふりて天下たちまちにうるほひ」の頃より車軸の雨が頻繁に現れ始める。吾妻鏡、承久軍物語、曾我物語にも見えるそうだが、末見である。

平家物語8の太宰府落の

折ふし降る雨、車軸の如し。

これでは水城から箱崎の津之の落人の苦勞を玄奘三蔵の流沙葱嶺ぞの難行を思い合せる。

次に源平盛衰記 14・三井寺食議の

折節降る雨、車軸を下して、

であるが、これでは最早、蓮根のような車軸、杵に似た車軸の面影はなく、後年の安原貞室の「かた言」(5巻・慶安三年・1650)の第二巻の次文を思い合せる。

車軸の雨とは、大粒に降侍るかたまりたる水の上に落て車の軸のごとく、とびあがり、頓てそのまはりに撒のかたちをなすことと也

これは雨滴が水上に落ちて、一瞬見られる現象、中国農諺の「釘^註」となる場合である。そして其後に拡がる波紋と合せて、車軸と考えた。雨水の流

註) 中国農諺の釘——旧拙著(中国物理雜談)の物理雜俎、一粒の雨。

れは多数の車軸の押合いへし合いで、もしも高速
度瞬間写真を撮ったとするならば、丁度水晶の多
結晶の塊のように、種々なる方向の車軸型の結晶
の塊の写真となるであろう。これが「車軸を流す」
であろう。

太平記 27. 田楽事、付長講見物事は京都の祇園
祭もま近い六月十二日の豪雨である。

其次、日、終日終夜、大雨降車軸、昨日、河原
ノ死人汚穢不淨ヲ洗流し、十四日、祇園神幸、路
ヲバ清メケル。

これは24時間程の降水であるが、次の康富記・
応永二四年・(1417)九月九日の降雨は3-4時間程で
ある。

朝間風雨如車軸、雖然日中以後止。

日本イエズス会の長崎学林の日葡辞典には

Xagicu no anie (著しく異常な雨)

Xagicuuo nagasu (手桶を傾けたような雨が降
る。)

が見え。また天草本伊曾保物語の病者と医師の事に

今宵雞の鳴く時分から今迄汗の出る事は(原文
はZZurucotouaであるがizzurucotouaであらう)^註

Xagicuuo nagasu 如くじや。

これは驚きである。如何に流汗淋漓でも車軸を流
すとは。いつその事、余りにも大量の流汗で大塩湖
が出来き、危なくも彼が溺死しそうになるならば
この「車軸を流す」も似つかはしい事になるだらう。

徳川期では、車軸は西鶴物によく見られる。

好色二代男(諸艶大鑑)には「頻りに車軸して」
「車軸を降らす」。

日本永代藏巻四に「春の日の長閑なるに、俄に黒

註 外に原本には次の例がある。

izzucu (425葉18行、437葉2行) 何處。

izzuru (489葉4行) 出ル。

izzute (420葉24行、421葉7行) 何レ。

雲立まよひ、車軸平地に川を流し」。

西鶴諸国はなし・巻一、これでは神から娘の人身御供を要求されている人々は「さもなくば、七日が中に車軸をさして人種^{ヒトダネ}のないやうに、降ころさんとの御事かのおのこはやと談合して」。

この気味の悪い車軸に対して、歌舞伎十八番の毛抜の「小町が名歌に天も納受あつて、たちまちシヤジクの雨を降し、四海太平に納る」は待望の恵の車軸である。

また歌舞伎園係では、鳴神、因幡小僧雨夜新にも見える。

滑稽本・東海道中膝栗毛にも駿府と丸子の宿の所で「夫より手越^{テゴシ}のさとにいたるに、又もや俄雨ふり出して、たちまち車軸をながしければ」。手越の里は安倍川を渡った西側で、駿河国安倍郡手越村であつた。

最後に動詞になった車軸がある。「みそし(三十路)あまりのおのこ(累子)と見えてやぶれがさ(破れ笠)をかむり、つづれミの(蓑)を身にまとい、しやぢくる(車軸る)雨にそぼぬれつつ」
一休はなし・巻之三(嘶本大系第三卷三十八頁上)
最後の最後は、助六の「煙管の雨」は原始に返ったのであろうか。

月桂と星榆など

—— 古代星界植物考 ——

月桂

唐の段成式の酉陽雜俎の天咫にみえる、

旧言、月中有桂、有蟾蜍。故異書言、月桂高五百尺、下有一人、常斫之、樹創隨合。人姓吳名剛、西河人、学仙有過、謫令伐樹。

は有名である。この酉陽雜俎の題名は梁の元帝の賦「訪酉陽之逸典」より取られたと云われ、劉宋の盛弘之の荊州記などによると、湖南の沅陵県の小酉山下に石穴があり、その中から何時の頃か千卷もの古文書が発見され、これが酉陽の逸典であると言う。言伝えでは秦代の物だとも、また唐代の奇妙な方士張果（彼自身は堯帝の丙子年の生れだと称していた。この丙子年は堯帝の三十三年と成るには成るが）は堯代の善卷だと主張する。

この小面山と付近の大面山を合せて二面と言はれるが、後世、この二面の二文字は、自分の秀れた藏書や叢書を誇って、多くの雅号に用いられた。このように古代でも文書を山の石穴などに保存する方法は秦の始皇の焚書に代表される権力者の暴力や心無い人々による破棄消滅から自書を防衛し、愛して呉れるに違いないと信ずる後世の聖人君子を求める、一種のTime Capsuleだった。司馬遷の史記の太史公自序にも「藏之名山、副在京師」とあり、彼も史記の正副二部を作って、正本を名山に藏し、副本を一般公開したようである。また葛洪も抱朴子の序文の最後に「名山や石室に藏する程の書ではないが」と記し、何喬遠は明代の十三朝遺事をまとめた自撰の書名を「名山藏」としたのであつた。

さて、最初の酉陽雜俎の本文に帰って、その故

異書は、この画陽の逸典を指すに違いない。「月
に高さ五百丈の肉桂の大木があって、この樹の下
に一人の男が居り、常にこの桂樹を伐っているが、
切っても切っても、すぐに接着して切り倒せない。
この男の名は呉剛と言ひ、西河人（戦国時代、魏
の文侯に仕えた兵法家呉子が太守をしていた西河。
孔子の高弟子夏が定住していた西河だろうか）で、
仙術を学んでいたが、何かの過失を犯して罰とし
て桂樹を伐ることを命じられたのである。」

この話は、後世、清の舒位によつて戯曲「画陽
修月」となっている。それは嫦娥（姮娥）の命によ
つて、この呉剛が月にいる諸仙を督して月の缺げ
たのを修理することを演ずる。

以上は「月桂不斫」の話であるが、それに対し
て今度は「折月桂」（最初は折桂である）の話がある。
それは晉書郗詵伝の次文に始まる。

卻説答曰、臣學賢良對策、爲天下第一、猶桂林
之一枝、崑山之片玉

これは科擧に及第すること、桂林の一枝、崑
崙山の一片の玉石に喩えたのであろうが、崑山の
片玉はいいとして、桂林の一枝は何人ともなくもの
足りない。後魏の酈道元の水經注に林邑国の森林
には香桂が林をなしていると見えるから、「林邑の
桂林の一枝」だろう。林邑は象林で今のベトナム
南部に当り、仙人桂父の故郷である

卻説伝のこの記事から唐代以後、科擧に及第す
ることを「折月桂」と言うことになってゆく。し
かし語源である「桂林之一枝」には月影の片鱗も
ないから、吳剛には斫れない月桂を自分が手折っ
たと言うことは至極お目出度い事に違いないから、
この吳剛の話が付加して「折月桂」が成立したに
間違いない。

ところで月桂は唐代以前にも多くの詩賦に歌われているのであろうが、それよりも面白いのは、中国で始めて歳差現象に論及した人として知られる晋の虞喜の安天論の中に月中仙人桂樹の伝説がある。

俗伝、月中仙人桂樹、今視其初生、見仙人之足、漸已成形、桂樹後生焉。

つまり、初めは仙人の足と見えたものが、段々に自ら変形して後には桂樹に成った言う月桂の発生伝説であらう。

また、桂の植っているのは月面だけとは限らず、蓋天面にも生じていたようである。その事を次の古楽府が証明する。

古楽府の「步出夏門行」に

和径過空廬	好人常独居
卒得神仙道	上與天相扶

過謁王父母	乃在太山隅
離天四五里	道逢赤松俱
攬轡爲我御	將吾上天遊
天上何所有	歷歷種白榆
桂樹夾道生	青竜対伏跼

この最後から、次の「隴西行」の最初が始まる。

天上何所有	歷歷種白榆
桂樹夾道生	青竜対道隅
鳳凰鳴啾啾	一母將九雛
顧視世間人	爲衆甚独殊
好婦出迎客	顔色正敷愉

この隴西行の大部分は、清く正しい礼に叶った Service、それども何人ともなく Sexy な女性が描かれているが、それは本題とは縁遠いようなので考えないこととして、「步出夏門行」を専ら問題にしてゆ

く。古い時代の楽府には恒に音楽が随伴していて、歌、行、歌行、引、などは音楽の調子、西洋音楽の Andante, Adagio, Allegro などに類似すると筆者は理解する。「歌」はのびやかな体、「行」はよどみのない体、「歌行」は以上の二体を兼ねた体であるとされる。

さて、題名中の夏門が分らない。南門かも知れないが、手前勝手に中国（華夏）からの上天への出口と考えておく。内容は、やつと神仙道を会得した男が天国之赴かんと欲する。途中で王父母に謁するが、通常王父母は祖父母であるが、これは男仙の元締の東王公と女仙の主領の西王母ではなからうか。下図周りを見ると其處は太山（泰山）の片隅であつて天までに四五里の處である。途上有名な仙人の赤松子に逢つて同行する。それは彼に温かい希望を与えたに違いない。仙人赤松子は

同伴者に対して実に親切な仙人として知られる。

列仙伝の赤松子の項にも

炎帝（神農）の末の女が追ってきて、これまた仙人になることができ、二人とも姿を消した。（沢田瑞穂氏訳）

とみえ、史記・留侯世家（張良伝）にも

願はくば人間界の事は^ス棄て、赤松子に従い遊ばんと欲す。

また漢の嚴忌の楚辭の哀時命篇にも

赤松と共に友を結ばん。

とみえる。本題には関係ない事であるが、赤松は普通神農の雨師とされている。しかし屈原の楚辭・遠遊に「聞赤松之清塵兮、願承風乎遺則」とある。これと後漢の班固の賦の「雨師汎灑、風伯清塵」を比較してみると、赤松は雨師ではなく、風伯ではないのかと疑いたくなった。閑話は止めにして、

赤松子に逢った男は、彼に手綱を取られて上天に到達する。その天上の風景は白榆が列を成して植り、桂樹は道を夾んで生え、青竜は足を伏せて対し、鳳凰は美声で鳴いている。-----

この桂樹は月に随伴しない、つまり月の植木鉢のない桂樹であり、蓋天面に直接植立っているのである。また此處に現れている星界植物としての白榆も同様である。

—— 星 榆 ——

陳の江総の詩「七夕」に

漢曲天榆冷 河辺月桂秋

また、唐の劉憲の「奉和聖製“登驪山高頂寓目”
應制詩」は中宗の聖製（御製）の「登驪山高頂寓目」に皇帝の希望に応（應制）じて和した詩であるが、その中に、

直城如斗柄　　宮樹似星榆

と有って、白榆も星界植物とされる。河曲は春秋時代に秦と晉がよく戦った古戦場であるが、ずうと南下して来た黄河が直角に折れて東行する現在の永濟県付近である。漢曲は黄河を銀河（天潢）に置き換えた感じで、銀河の星屑（天榆）は淡白く冷たく、河辺（天河の岸辺）の月は最早秋である意であろうか。

また劉憲の詩は山麓に温泉宮（後の華清宮）のある、この驪山の山頂から鳥瞰した風景を歌ったものであるが、この直城が分らない。長安の古蹟志である三輔黃圖に直城門があるらしいが、今のところ参考出来なideい。しかし「如斗柄」とあるからには、北斗の斗柄、大熊座のδ, ε, ζ, η星を結ぶものと考えれば、眞直な細長い城を思はせる。宮樹は宮道の旁に植えられた樹木で、山

頂から見ると星榆（星屑）のようだとの意味であ
らう。

その外に、唐の薛逢の「天上種白榆賦」、日本
人の漢詩では山田三方の「七夕詩」

金漢星榆冷　　銀河月桂秋

これは前記の江総の七夕詩に学んだと言はれるが、
語彙の貧困さが目立つ。また菅原文時の「織月賦」の

日沉西海　　伴星榆兮

この太陽に伴って西海に沉（沈）む星榆は何を指す
のか、よく分らない。織月は細々しい月、三日月
であるから、太陽没後、すぐに西海に没す。或は
織月の事かも知れない。

ところで、この白榆であるが、爾雅の釈木によ
ると、榆の白いものが枌であると云う。詩経陳風
の

東門之枌　宛丘之栩　子仲之子　婆娑其下

陳国の東城門は繁華街で、その白榆や遊園地。

宛丘^{クマキ}の榊^{ハシヤ}の木の下を、身分の高い子仲家の娘さんが煙^{ハシヤ}を廻っているの意味らしい。また豊粉榆社は漢の高祖が大変崇拝していた彼の故郷・沛（淮河流域の北部）の豊邑（村）の鎮守で、多分鎮守の森が白榆だったのだろう。後に都に移した。

粉榆（白榆）は爾雅の晋の郭璞の注によると「粉榆先生葉、卻著莢、皮色白」（先ず葉が生じ、後に莢（翅果）を着ける。そして樹皮は白い）とのことであるが、清の朱駿声や郝懿行などの考証家はそれを演繹して榆を赤白の二種に別け次の如く考えている。清・朱駿声撰「説文通訓定声」では、

赤榆 先著莢後生葉 白榆 先生葉後著莢

清・郝懿行撰「爾雅義疏」では

榆有赤白二種、赤榆先著莢後生葉、白榆先生葉後著莢、以爲異、白榆皮白、剝其麤皴中更滑白（榆には赤榆と白榆の二種があり、赤榆は先ず翅

果を着け、後に葉を生ず”。それに対して白榆は先ず葉を出し、後に翅果を着ける。このように赤白の間には違いがある。そして白榆の表皮は白く、表面の荒皮を剥ぐと中は更に滑らかで白い。)

自分の目で観察することを自分の特徴と自負していた却蹊行のこの説は如何であろうか。

現在白榆はノニレ (*Ulmus pumila* L.) と同定されている。北村四郎先生の“本草の植物”に依ると、華北のニレ属の中で最も多く存在し、その分布は中国東北部、河北、山東から、南は江西、四川に及ぶと言う。ところで一植物の年中行事を植物学では何人と呼ぶのか知らないが、仮りに生態年暦とすると、このノニレの年暦を知りたいと、資料を索してみたが、植物学には全く無知な筆者には不可能な事のようにあつた。それにつけてもノニレの年暦が知りたいものである。唯だ満久崇磨先

生の「同名異木のはなし」の「金の成る木・榆」の項に、

ノニレの辺材は黄白色、心材は褐色から紅褐色、白榆の名はおそらく辺材の色調によるのだろう。

と見えるが、これは郝懿行の「剝其鹿皸中更滑白」を証明するかに思はれる。

—— 地 影 ——

月面に見える模様を蟾、兔、桂などに見立てる考えの外、それを地影とする説もあったようである。酉陽雜俎に

或言月中蟾桂、地影也、空處水影也。

また五代の邱光庭の兼明書の雜説・月桂に

今人謂爲折月桂、何其謬歟、且月中無地、安得有桂、蓋以地影入于月中、似樹形耳。

これは「今の人々は科學に及第する事を折月桂と

言っているが、それは誤りではないのか、月には土地はないのであるから、桂の育ち得ようがない、桂樹と見えるのは、我がこの土地の模様が月面に
「って、その形が樹に似ているだけではないのか」の意味であろう。西陽雜俎の「地影」、「水影」も、地影は陸上の地勢の複雑な處の影、水影は海面などの平坦な處の影だろうか。これは怖らく仏説に出るものであろう。それを換骨したものに思はれる。

印度の世界誌の中心である須弥山王の南方、三角形をした大陸「閻浮提 Jambu-dvīpa」の名前は Jambu (Eugenia Jambolana) の巨大樹、或は林に由来するとされるが、また光明にして、あくまで清淨であるべき月の曇りは、この閻浮州の閻浮樹の影であるとされる。次の如くである。

長阿含經（後秦・仏陀耶舍共竺仏念訳）に

復以何緣、月有黑影、以閻浮樹影在於月中、故

月有影。(大1-147b)

起世經(隋・闍那崛多等訳)

月宮殿中、有諸影現、諸比丘、此大洲中、有閻浮樹、因此樹故、名閻浮洲、其樹高大、影現月輪、以此因緣、有諸影現。(大1-361b)

起世因本經(隋・達摩笈多訳)

月大宮殿、其中有影、諸比丘、有閻浮樹、因此故言閻浮洲也、於彼清淨月輪光明、爲其作影、此因緣故、有於影現。(大1-416b)

大禰炭經(西晉・法立共法炬訳)

月中何因復現乳色也、有樹名閻浮利是故名此天下、爲閻浮利、其樹下有山、皆以七室作之、高八百里、周匝亦八百里、其樹高四千里、周匝二千里、圍五百六十里、根深八百四十里、其影照現月中、故使月大城郭現乳色不明(大1-307c)

以上の如く月の曇りは閻浮樹の影である。

——月 桂 冠——

現在の「月桂樹はローリエの樹、月桂冠はローリエの葉で作った冠」となったのは何時からであらうか。

1870年に羅馬で出版された羅和辞典 (Lexicon Latino-Iaponicum) は切支丹時代天草のカレジオ (Collegio Iaponico) 関係で作られた羅葡辞典 (それには日本語も付加されていた) にもとづくものであるが、これにローリエの冠がある。次の如くである。

Laurea — Xigimino yōnaru qino fa (櫛
シギミノ ヨーナル キノ ハ
の様なる樹の葉), sono fano camuri (其葉の冠)
ソノ ハノ カムリ

Laureatus — Xigimino yōnaru qino fano
シギミノ ヨーナル キノ ハノ
camuriuo cazzugitaru mono (櫛の様なる樹の
カムリヲ カヅキタルモノ
冠を被きたるもの)

Laureola — Miguino qino fano chijsagi
ミギノ キノ ハノ チイサキ

天使、默示、背教者、偶像、救世者、預言者、
安息日、三位一体、
なども、この字典の華訳語から採用されたもので
あつた。

それはそれとして、この桂樹と云う文字は前記
の古楽府「步出夏門行」及び「隴西行」の中で出
合つた事を思い出して戴きたい。

この桂樹と Laurel の關係は植物学的な同定にあ
るのではなくて、前記の如く折桂は科擧に及第す
ること、それは榮、成功、出世に繋り、一方
Laurel の冠も武勳、稱讃、出世に絡るものである。
しかし、中國人が千年以上の間も育んできた月桂
が Laurel に簡單にもつて行かれて了つた事は少し
残念にも思はれる。

